

浄土院（重文）

ここは比叡山の開祖、伝教大師・最澄（767～822年）の霊廟で、比叡山中でももっとも清浄な聖域である。最澄は、一般の人々であつても悟りを開くことができるとする大乘仏教の教えに基づく大乘戒による授戒の許可を天皇から得ることにその生涯を捧げた。最澄は822年に没している。

最澄の高弟である慈覚大師・円仁が854年にこの地に浄土院を建立した。中国の竹林院を模したこの建物には、最澄の遺骨が納められた。以来、霊廟を守る僧侶を侍真（じしん）といい、昼夜を分たず、厳しい戒律のもとに心身を清浄にして、生身の大師に仕えるように勤めなければならないとされている。

また霊廟を取り囲む玉垣の辺りには沙羅双樹と菩提樹が植えられ、極楽浄土の雰囲気がかもしだされている。仏陀は菩提樹の下で瞑想しているときに悟りを開いたとされ、また沙羅双樹の木の下で亡くなったとされている。侍真は、早朝より夕方まで勤行と掃除、勉学修行に励む。籠山修行の内規にしたがった生活であり、十二年間、決して比叡山を出ることはない。